

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01154

研究課題名（和文）10年後の被災都市におけるミュージアムの教育プログラム ニューオーリンズを事例に

研究課題名（英文）Education programs at museum after ten years of disaster: case study of New Orleans

研究代表者

横山 佐紀（YOKOYAMA, Saki）

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：70435741

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：2005年にハリケーン・カトリーナによって大きな被害を受けたニューオーリンズにおいて、同市の中心地にあるルイジアナ州博物館が唯一、常設展示を通じてその記憶を伝えている。しかし、観光が主力産業である同市においてはハリケーン被害の展示が結果的に観光客に向けたものとなっていること、ハリケーン後の公教育システムの激変により、市民と博物館との連携そのものが困難となっており、観光産業、教育制度と博物館がいかなる関係を結ぶのかが重要な課題となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災厄を伝えるミュージアムにおいては、災厄の種類を問わず、何を、誰の、どのような視点において表象するかが課題となるが、照明や展示空間の構成、パネルの色合い、写真などのイメージのレイアウトなど、「災厄のデザイン」とでもいべきものが重要である。アメリカにおける災厄のミュージアムについては、ホロコースト博物館がひとつのプロトタイプとなっており、このプロトタイプを災厄に応じて継承することで、来館者が犠牲者に感情移入できる空間が生み出されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：New Orleans was severely damaged by Hurricane Katrina in 2005 and the Louisiana State museum is the only museum that permanently displays the memories of Katrina. However the exhibition "Living with Hurricane" is appreciated mostly by the tourists not by the local residents. After Katrina the public education system in the city has been drastically changed with flourishing of charter schools and this has weakened the tie between the museum and school. To keep the memories and experiences of this disaster raising good relationship among the museum, school and tourism is quite essential.

研究分野：ミュージアム研究

キーワード：災厄の記憶 ト라우マ イメージ ホロコースト 自然災害 子ども博物館 観光

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、東日本大震災から4年を経て、被災地域のミュージアムがその記憶をいかに継承しているかを探るただ中であつた平成27年度(2015年度)に開始された。一方、同年はアメリカのルイジアナ州ニューオリンズに甚大な被害をもたらしたハリケーン・カトリーナ(2005年8月)から10年であり、災害の記憶が同市のミュージアムにおいてどのように継承されているのかを調査することは、日本のミュージアムにおける災厄の表象を検証する際の手がかりとなることが期待された。

### 2. 研究の目的

本研究は、共同体の連帯を強める一方で亀裂をもたらし得る自然災害の記憶について、ミュージアムでどのように展示し、伝えていくことが可能なかを、2005年8月のハリケーン・カトリーナによる被災から10年を経た現在のニューオリンズを対象に検証することを目的とする。事例としては、ルイジアナ州博物館に追加された展示「ハリケーンと共に生きる—カトリーナとその後」を取り上げ、展示品の収集方針、展示構成、教育普及プログラムについて、現地調査および文献・資料調査を行う。同時に、ニューオリンズで進行中の新たなメモリアルとミュージアムのプロジェクトについても調査を進める。一方、自然災害とは異なる災厄の展示の事例として、2014年4月にオープンしたナショナル911メモリアル&ミュージアムにも目配りをし、開館に至った経過、収藏品、展示構成、教育普及プログラムを分析し、テロリズムという別の災害をテーマとする事例とを比較する。

### 3. 研究の方法

本研究は、現地調査を中心としつつ、以下の方法にて実施された。

#### (1) 文献渉猟

ミュージアム・スタディーズ関連書籍、アメリカ史、など関連分野の書籍を幅広く渉猟した。

#### (2) 現地調査

展示調査(展示空間の構成、展示物のデザインなど)

ミュージアムの担当者(キュレーター、エデュケーターなど)への聞き取り調査

調査対象館の展示や教育プログラムについての情報収集など

### 4. 研究成果

#### (1) ニューオリンズにおける調査

ルイジアナ州ミュージアムにおけるハリケーン・カトリーナの展示

ルイジアナ州博物館では、同館1階のほぼすべての展示空間を使って「ハリケーンと共に生きる Living with Hurricane」という常設展示が行われている。展示はハリケーンがルイジアナ州に接近する様子を時系列に追うことから始まり、救出と被害の状況(避難場所となったメルセデスベンツ・スーパードームの惨状と、その後の救出活動、水没した家の屋根裏部屋に閉じ込められた人や、屋根に上がり救出を待つ人々の様子など)が当時の報道写真やニュース映像によって再現されている。また、救出にあたった人々が着用していた装備、スーパードームの椅子などのほか、救助の状況を表わす記号がペンキで描かれた家の壁や、日記のように日々の様子が記録された塀などが常設展示されている。

次の展示室では、海拔よりも低い土地が多く「スーパ皿」とも形容されるニューオリンズにおいて、どのようなメカニズムでハリケーンによる災害が生じるのかを体験的に学ぶことのできる科学体験コーナーが設置されている。

この展示室に続くのは、「レジリエンス」をテーマとする一室である。ここでは、被災した人々のインタビューの動画をモニターで見ることができ、ただし、ひとりひとりの証言を来館者が選択して視聴するタイプではなく、数名の証言を編集してひとつにまとめたビデオをホールで繰り返し上映するタイプである。ルイジアナ州博物館における「ハリケーンと共に生きる」展は、ハリケーン・カトリーナという自然災害を、報道、被害、科学、再生のテーマにそって検証する構成となっており、調査時点で、ニューオリンズにおいてハリケーン・カトリーナについて学ぶことのできる唯一の展示である。

それではそのような展示を誰が見て何を学ぶのか。それは、必ずしもニューオリンズの市民ではないという点が課題として浮かびあがってくる。ルイジアナ州博物館はニューオリンズの観光地区フレンチ・クオーターの中心に位置しており、来館者の多くは観光客である。ニューオリンズ観光のひとつとして博物館に立ち寄り、同館2階に展示されているマルディ・グラ(毎年3月に行われる大規模なお祭りで、多くの観光客が詰めかける)と併せてカトリーナの展示を見ることが多い。すなわち、被災の記憶やニューオリンズ市民の経験が市民に向けて展示されているというよりは、「被災の経験を市外からやってきた観光客が眺める」という構図となっているといえる。ここには、カトリーナ後、学校と博物館の連携関係が変化していることが影響していると考えられる。ルイジアナ州博物館教育担当者によると、ハリケーン以後、黒人の子どもの割合の高い公立学校の予算が削減されてチャータースクールが増えており、学校団体の来館実績数が減少しているという。調査中に学校団体の訪問に立ち会うことができたが、カトリーナの

展示ではなく、ニューオリンズやルイジアナの歴史を展示している展示室（プレスビテール館）での学習が中心に置かれているようであった。

ルイジアナ州博物館がこのような常設展示を行う一方で、民間の非営利団体 Katrina National Memorial Foundation（以下、KNMF）が、カトリーナの被害を記憶し、犠牲者たちを追悼する施設もあわせもったミュージアム設立を進める動きがある。情報収集を進めると同時に、同団体にコンタクトをとろうと何度も試みたが、研究期間中に返信を得ることができなかった。その後の当該財団の動きをウェブサイトや地方紙での報道等を通じて追跡しているものの進捗状況に大きな進展は見られない。設立予定地はニューオリンズの観光地区、フレンチ・クォーターに確保したと伝えられるが、事務室がフレンチ・クォーターから離れた場所に仮設的に用意されているのみで、展示施設ははまだ完成されていない。

博物館という場における記憶の継承が問題含みである一方で、カトリーナの「観光化」はある程度定着しているように思われる。ルイジアナ州博物館があるフレンチ・クォーターは、カトリーナによる被害を受けたものの、より大きな被害を受けたのはポンチャートレイン湖周辺の住宅地である（湖の堤防が決壊したため）。この地域を実際に目にすることができるのが「観光ツアー」である。調査時点で、フレンチ・クォーターを出発し、カトリーナの爪痕をめぐるバスツアーが毎日行われており、いまだに爪痕が残されており、被災したままの住宅、空き家が残され雰囲気があれた状態となっている地区、浸水の高さがマークされているガソリンスタンド（営業している）などを見ることができる。このツアーでは、カトリーナを記念とするモニュメントや、カトリーナの被害状況を説明する公園のような施設を見学することができ、いくなれば被害の「現場」を体験することが可能である。ルイジアナ州博物館が被害のもっと深刻だった場所からやや隔たっているがゆえに被害の状況を直接的に伝えることが難しいのに対し、被害状況そのものを見せる役割は観光産業化されているようにも思われる。

ルイジアナ州博物館におけるカトリーナの展示については、学校システムの変化、観光地としてのメリットとデメリット、博物館以外の観光産業との関係などが絡み合い、市民の経験として被災を振り返り記憶することへの課題が浮き彫りとなった。

#### ルイジアナ子ども博物館における展示

一方、子どもを対象としたルイジアナ子ども博物館では、2015年にカトリーナを記念する子ども向けの小さな企画展が行われた。幼いながらに被災の経験を記憶している子どもたち、ティーンエイジャーであった子どもたち、他州に転出したものの転居先で「カトリーナの子だよ」と差別的な待遇を受けるなど、それぞれが辛い経験をしていることに配慮し、ハリケーンそのものをふりかえるというよりも、自分たちにとってニューオリンズとはどのような街か、どのような意味があるのかをふりかえるインタラクティブな展示が行われていた。会場では、子どもたちが自らの記憶や体験を語るビデオが上映されていたが（youtubeでも公開）、これについては心理学の専門家が監修し、子どもたちのトラウマ体験への対応に万全を期して制作されている。

現地調査を行った日は休館日であったため、子どもたちが実際にその展示でどのようなインタラクティブな活動を行っているのを見ることはできなかったが、ハリケーンの体験をふまえた立ち寄り型プログラムとして非常に興味深かったのが、「建物を作ろう」というコーナーである。ニューオリンズはフランス文化が色濃く残る街で、建物も独特である。バルコニーがついていたり（そこが社交場となる。道をはさんで、2階のバルコニーどうして話したりやりとりをしたりする）、中庭があり、道路に面した表側が商売のスペース、中庭から後ろのバックヤードが家族との私的なスペースとして分けられるといった具合である。そのような、自分たちが住む町ニューオリンズの特徴のひとつとして「建物」を伝える展示の一角に、木製のブロックで家を作るコーナーが設置されている。これはだれもが立ち寄って、好きなだけ時間をかけてブロックを組み合わせて自由に建物を作るといったものであるが、完成した建物はそのままに残され、次の人がやってきて自分の建物を作るときに壊される。この繰り返しを通じて、子どもは、建物（家）というのは永遠に残るのではなく、何かで壊され、また立て直されるものなのだということを学ぶという（エデュケイターへのインタビューによる）。カトリーナによる建物の損壊と再生ということを明示的に掲げずとも、子どもがアクティビティを通じてこのテーマを学ぶことができるよう構成されている。

ルイジアナ子ども博物館の企画展示は、あくまでも期間限定である。子どものトラウマへの配慮がなされたうえであえて常設化はせず、過去の負の遺産の継承というよりも「私たちにとってニューオリンズとはどのような場所なのか」という未来志向の展示を行うことが意図されている点が、子ども博物館ならではの特徴だといえよう。

一方、継続的な展示プロジェクトについては、KNMFのプロジェクトが実現をいまだに見ていないことに加え、ルイジアナ州に設立予定でファンドレイジングが進められていたナショナル・ハリケーン・ミュージアム&サイエンス・センターの計画案が廃止となったという事案もあり（<https://slowdisaster.com/need-national-hurricane-memorial-museum/>）、KNMFに限らずハリケーン被害を伝えるミュージアムの設立一般が非常に困難な事態に直面していると言わざるを得ない。

なお、今のところ展示には結びついてはいないが、ニューオリンズ歴史センターが、ニューオリンズの歴史を記録するプロジェクトの一環として、カトリーナのファースト・レスポンドーズ（災害時に最初に現場に救助に駆けつけた人たち）のオーラルヒストリーを学芸員が記録し資

料として蓄積する努力が進められている(歴史センターを訪れる研究者などに公開されている)

#### 911 ナショナル・メモリアル&ミュージアムにおける調査

ニューオリンズでの調査に加え、テロによる被災の事実を伝える 911 ナショナル・メモリアル&ミュージアム(以下、911 ミュージアム)および、911 トリビュート・ミュージアム(以下、トリビュート・ミュージアム)においても、教育プログラム担当者へのインタビュー調査と展示調査を行った。

911 ミュージアムについてはすでにまとまった研究報告などがなされているが、本調査で明らかとなったのは、以下の4点である。

- a. 犠牲者ひとりひとりに焦点を置いていること(個人の物語の強調)
- b. 犠牲者の写真の展示にパターンがあること(グリッド状に展示していることが多い)
- c. 犠牲者の物語に焦点を置くがゆえに、「なぜこのようなテロがアメリカに対して行われたのか」という政治的因果関係についての分析が弱いこと(たとえば、ビン・ラディンはアフガン戦争時にアメリカのCIAが訓練して育てた兵士であるにも関わらず、展示ではその事実にもふれられていない)
- d. 主要な展示室が地下にあることもあり、広い空虚なスペースに残骸のようにも見える展示品がレイアウトされ、そこにスポットライトが当てられているがゆえに、全体的に劇場的な効果が生まれ、来館者の感情に強く訴えかける空間が構成されていること。

b.に見られる「犠牲者の個人写真の展示」についてはトリビュート・ミュージアムについても同様であり、個々人の写真を壁面やスクリーンにレイアウトする手法に共通性を見ることができると。また、d.からは、災厄のミュージアムにおいては、来館者の感情に訴えかける展示デザインが来館者の体験を左右する大きな要因であり、館側もそのような効果を狙ってデザインを決定していることが推測された。しかし、これらは911関連のミュージアムにおいて初めて実現されたわけではなく、ワシントンDCの合衆国ホロコースト記念ミュージアム(1993年開館)がひとつのプロトタイプを提示してきたものと考えられる。

ニューオリンズおよびニューヨークにおける調査結果については、共同研究会「ミュージアム歴史をかたる権利と権力」(立教大学、代表:川口幸也)において報告し、参加者とディスカッションを行った。

#### (2) 発展的に生じた新たな課題

以上を通じて、アメリカにおけるホロコースト表象の手法とデザインの検証が新たな課題として浮かび上がった。1993年に開館した合衆国ホロコースト記念ミュージアム(United States Holocaust Memorial Museum、以下、USHMM)は、アメリカ国内に20館ほど開設されているホロコースト関連ミュージアムに影響を及ぼしているばかりでなく、その展示デザインは、災厄の種類を問わず負の出来事を伝えるミュージアムのプロトタイプとなっていると考えられる。言い換えるならば、アメリカのミュージアムにおける災厄の表象の問題を検討するには、USHMMについての検証を避けては通れないということである。

そこで、本研究期間の後半において、USHMMにおける展示調査を進めた。そこで生じた課題とは、歴史ミュージアムとは別に、負の遺産を伝えるミュージアムを「メモリアル・ミュージアム」というカテゴリーにおいて検証する必要があること(Paul Williams, *Memorial Museums: The Global Rush to Commemorate Atrocities*, Oxford and New York: Berg, 2007)。911関連ミュージアムにおける調査を通じて明らかとなったように、犠牲者の写真の展示デザインについて、USHMMの展示構成を検証し「災厄の表象のパターン」を洗い出す必要があること、以上である。その結果、現時点において以下の考察を得ている。

・USHMMにおける「タワー・オブ・フェイスズ(Tower of Faces、リトアニアのエイジェスキ村の人々の日常を写した写真が1階から3階までの吹き抜けの壁面に掲げられている展示。ここに写されているほとんどの人がホロコーストの犠牲者となった)」が、犠牲者個人の物語を伝えるために写真を用いる展示のひとつの典型となっていること。

・他方で、いわゆる残虐写真(atrocity photos)に関しては、撮影者がナチス側の人間であることが容易に推測されるにもかかわらず、犠牲となった人の個人名や撮影者が明示されることはまれで、展示を見る者がナチスの視線と同一化するということに対する配慮がなされていないこと。

これらは災厄の種類を問わず、「ミュージアムが負の遺産を、何によって、いかに展示するのか」というきわめて重要かつ基本的な問題に通じるものであり、これについては、現時点での暫定的な結果として論考にまとめた(横山佐紀「ミュージアムで痛ましいイメージを見ること、展示すること ホロコーストの写真をめぐって」川口幸也編著『ミュージアムの憂鬱 揺れる展示とコレクション』水声社、2020年、221-244頁)。本研究費の研究としてはここでひと区切りということになるが、この課題については引き続き調査研究を重ねていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山佐紀
2. 発表標題 被災の記憶とミュージアム - 10年後のニューオリンズとニューヨーク
3. 学会等名 立教大学ミュージアム共同研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横山佐紀
2. 発表標題 歴史と記憶の装置としてのミュージアム
3. 学会等名 アメリカ学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 横山佐紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 163
3. 書名 学芸員になるには	

1. 著者名 横山佐紀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 416
3. 書名 川口幸也編著 ミュージアムの憂鬱	

1. 著者名 横山佐紀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 165
3. 書名 ミュージアムを知ろう	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----